

各部記事

庶務部

幹事 難波智龍

棲神廿二號所載以後を簡單に報告する。

棲神第廿號記載已後(昭和十一年十二月以降)主要記事

一月卅一日 劍道部寒稽古納會開催。

二月十三日 棲神第廿二號製本完了發行す。

二月十六日 宗祖降誕の聖日を卜して校内雄辯大會開催

多數辯士若人の情熱を吐露して壇上を花々しく飾る、

會員一堂に會して此の日を意義あらしめたり。

二月十八日 棲神第廿二號頒布を終る。

三月十六日 昭和十一年度第廿六回卒業式舉行、式後送

別茶話會開催、閉會後記念撮影を行ふ。本年度卒業生

左の如し。

高等部 (十九名)

田邊 正知 永瀧 堯順 井澤 清光

小友 寛榮 山田 英夫 古川 宣悦

中谷 堯順 林 惠龍 田島 仙易

松本 良温 草ヶ谷 宜慶 的場 文雄

片岡 光乘 井口 智正 掛橋 泰壽

丹羽 好文 葛原 榮靜

中等部 (十二名)

下邨 顯淨 高野 教誓 穂坂 真彌

大橋 智雄 武智 實靜 小山田 鳳隆

田川 義烈 平岡 正學 岩佐 海廣

守山 恭司 新津 義尙 四條 貫要

三月十三日 立正大學、學部、専門部本年度卒業生十六

名登詣各幹事接待に努む。

四月廿一日 新幹事選舉(當選者上の如し)

四月廿九日 滿洲靈廟西岡大元師日滿僧五十餘名引卒登

山歡迎。

五月四日 同窓大會開催。

前年度幹事解任

庶務部幹事 (幹事長) 田中 惠 嚴君

會計部幹事 下 邨 顯 淨君

辯論部幹事 宇佐美 鍊 昌君

文學部幹事 牛 居 行 信君

同 助手 穂 坂 眞 彌君

運動部幹事 香 川 是 光君

購買部幹事 米 村 智 淨君

同 助手 清 水 文 要君

の諸君の過去一ケ年間の勞を多とするものである。

同日 新幹事就任、即日事務引繼す。

五月五日 校友大橋智宥師入山祝電。

五月六日、七日、八日 灌佛會辯論部活躍(該部参照)

五月十八日 永年の間大奥主事を兼ねて本學に教鞭を取

つて居られた望月德英先生が函館實相寺に勞轉される

事に成り惜別に臨み、記念品贈呈す。

五月廿日 望月德英先生出發に就き、學院生一同お見送

り。

五月廿日 立正中學七十二名登山歡迎。

五月二十四日 伊藤海聞師母堂葬儀弔電。

五月卅日 元教頭高田惠忍先生遷化弔電。

六月五日 伊豆大島旅行出發(運動部記事参照)

六月七日 望月德英先生入山祝電。

七月二日 高田先生葬儀、庶務幹事參列。

七月十五日 暑中見舞發送。

七月十七日 清水房母堂葬式參列。

七月廿七日 島添前昭君出征見送。

八月十五日 庶務幹事齋藤貫城君出征。後任は辯論幹事

難波智龍君を以て充つ。

九月初旬 辯論部幹事後任として高野教誓君就任。

日支事變動發に際し當身延町よりも應召兵士多數なる

が其の都度本學院は誠心誠意歡送を爲す。其の詳細は

省略す。

九月上旬 校友半田清師出征祝電。

九月中旬 本學教授加藤雲洞先生出征。

九月中旬 古屋是聞師出征祝電。

九月中旬 武内觀良君出征。

九月中旬 谷響淨君入營。

九月中旬 伊藤慈照君出征。

九月下旬 田口榮治君出征。

九月下旬 松岡堯雄君入營。

十月一日 勅額拜戴道路布教（辯論部記事参照）

十月二日 中山法華寺貫主宇都宮僧正登山同窓會に金一

封寄附さる。

十月十日 校内劍道大會舉行（運動部記事参照）

十月十三日 辯論部幹事高野教誓君出征。後任は難波庶

務幹事兼任と決す。

十月十二日 宗祖鶴林會道夜說教（辯論部記事参照）

十月十六日 秋季聯合雄辯大會（辯論部記事参照）

十月十七日 甲府街頭布教（同部記事参照）

十月十八日 吉川海音君の本葬參列。

十月卅一日 立正商業生五十名登山歡迎。

十月卅一日 校友結城瑞光師身延山派遣の従軍布教師と

して壯途に就かれ見送り。

十月卅一日 石黒湛全師出征祝電。

十一月二日 元本學教授田中惠春先生の入山式に際し祝

電を送る。

十一月廿日 嶽南野球大會參加、三年連續榮冠を獲得し

た事は運動部の記事に譲る。

十一月廿三日 本學青年學校教練査閱本會の名を以て支

院宛案内狀發送。

十一月六日 松木本興先生の母堂葬儀參列弔意を表す。

會計部

幹事 米村智淨

元來會計と云ふ役はケチ會計といつて憎まれる。それが會費納入期日が迫つて來ると一層濃厚になる。

然し乍らそのケチ會計もなくてはならない存在である

何故ならば本部は表面的な活動性を有しないが。各部の性能を十分に發揮する原動力ともなるものだ。その任務重大なる當該幹事に不肖私が自己を顧みずに就任いたしました。が、今や幸にして部業の大半をなし遂げた事は各部長先生と幹事諸兄の御指導によるは勿論、會員諸兄の克く會則を遵守された爲と茲に衷心より感謝の意を表する次第である。

十一月下旬出征兵士多數見送りの爲部長先生並に當局合議の結果臨時徵集をいたしました。

寄附者芳名

金一封	中山貫主宇都宮親下
金拾圓	山梨布教師會殿
金拾圓	立正商業殿
金拾圓	身延山内野日運殿
金貳圓	静岡小野智雄殿
金貳圓	大阪田中義正殿
金貳圓	高松五水井榮誠殿

金貳圓	身延町松司軒殿
金壹圓	同望月寫眞館殿
金壹圓	同望月源次郎殿
金壹圓	同加藤市郎殿

辯論部

幹事難波智龍

佛陀及び宗祖が聖教弘布の爲に選給ひし有力なる方は何かと云へば、我々は先づ口業の説教であると答へるであらう。

佛陀八萬四千の法門が金口の所説たるは云ふもしがな宗祖小町街頭の獅子吼は池上、四條、荏原等の衆多純信無垢な熱血護法の士を得給ひ、又不斷の講談談議は遺法相承の六老を初め末法萬年弘教の法器をして法華折伏の大利劍を磨かせ給ふ。三諫容れられず、默諫身延にして尙「書は終日御法論談」の御生活あり。既に法華經中「常説法教化」五十展轉」の弘法教化を以て其の常軌とする

等々。我等の軌るべき最善の弘教手段は自ら此の中に明示され、宗祖自ら「力あらば一文一句なりとも語らせ給ふべし」の誠勸の所以も是に在る事を知るものである。

吾が祖山學院の誇りは高祖の膝下に末代弘教の法器を哺み育て得るにあり。處尊きが故に其の成果の期待は勿論、夫が辯論の錬磨に於ては祖山のみに許された恵みがあり。毎月優に十數座の實演舞臺を有し、夫が唯の練習に非ずして宗祖照覽の御前に於ての弘教の第一線の實演たる事は眞摯に斯道の精進を望む者にとつて生涯忘る得べからざる感激であり。又此が將來への礎へたる事は過去の祖山辯論部史が語つて呉れて居り、未來の部史も語つて呉れる事であらう。

茲に祖山の眞面目と、重大なる意義はある。

而して日支風雲急を告げ、支那事變勃發に際しては銃後の完璧を急務とし、國民精神總動員に率先して、立正報國の大精神を掲げ、終始叫び続けた本年度の吾が辯論部の活動には果敢なるものがあり、部を預る幹事にも度

々異動ある中に宗祖の御庇護に併せて松木部長先生の指導宜しきと會員諸兄並に大方諸賢の絶大なる聲援に依り重大時局下に於ける重責の大半を完うし得た事を感謝しつつ、本年度の當部活躍の跡を簡單ながら報告する。

四月廿八日 前幹事宇佐美兄より事務引繼完了。

五月六日 釋尊御降誕會道路布教開演。

所 身延町山門前

演題辯士左の如し。

日蓮聖人の眞佛教把握の由致

生命淨化の道

信仰の實踐的意義

信仰生活の法悦

眞佛教の信

宗祖三祕の現代的意義

五月七日 同道路布教並映畫

所 山門前

宗祖の眞精神

難波 幹事

田中 泰勵君

土屋 詮肇君

加藤 智學君

藤本 正式君

部長 松木 本興先生

小崎 龍雄君

宗祖身延入山の聖意

難波 幹事

御草庵説教出張

本化教徒の覺悟

武田海正先生

山門説教出張

佛陀出世の本懐

松木 部長

五月十五日 耕辯會開催、於高貳教室。

映畫：身延山ニユース、宗祖御一代記

課題 思親閣上の日蓮上人

五月八日 同前 同所

難波 幹事

出演者 江口、田中(寛)、清水、厚海諸君。

日蓮聖人と日本國

丸山淳孝布教師

五月廿二日 耕辯會開催、於高貳教室。

現代世相と本化教徒の覺悟

結城瑞光布教師

課題 國体明徴と日蓮主義

靈域身延山の眞意義

出演者 高野、田中(泰)、齋藤、木崎、難波、尾崎の諸君。

映畫：ニユース、御一代記

六月五日 池上學林春季聯合雄辯大會に中五田村啓孝君を派遣す。

映寫監督 丸山布教師

演題 本性の閃きを讃ふ。

解説 丸山布教師、難波

六月 大善坊出張、深敬病院出張。

技師 米村、清水、齋藤

六月十二日 光山學院創立記念雄辯大會に中五田中靜光君を派遣す。

三日間に亘る道路布教並に映畫布教は本山後援の下に

演題 廟前の老杉に祖猷を聽け

頗る盛大に開催する事を得、本山並特には丸山布教師

の御盡力に深謝す。

五月六日より八日迄釋尊降誕會説教出張。

六月十五日より三日間 開闢會説教出張。

五月 深敬病院講演出張、大善坊説教出張。

六月十五日 山門説教出張。

六月十七日 開闢會道路布教。

場所 山門

宗祖身延御入山の眞意義

難波 幹事

身延の眞意義

三木布教師

六月廿三日 學内各級選出春季雄辯大會開催。當日のプ

ログラム左の如し。

一、開會之辭

難波 幹事

一、身延河の淨化に就て

中二 勝山政夫君

一、宗教の必要なる所以

中三 藤 英晋君

一、本化宗門青年の自覺

中四 井上龍温君

一、自己を再認識せよ

中五 田中靜光君

一、二陣三陣續かん

高一 河端清瑞君

一、希望の根源を導ねて

高二 大住快仁君

一、所 感

高三 吉田孝存君

一、批評訓辭

部長 松木 先生

一、閉會之辭

齋藤 幹事

七月十八日 深敬病院出張。

七月十八日 大善坊出張。

七月廿三日 總門發軔閣出張。

七月三十日 清正公祭禮出張。

七月卅一日 覺林房祭出張。

因みに山門、御草庵、覺林房、大善坊、本妙庵、深敬

病院等は當直割に依り毎月出張す。

特に松木部長の指導と尾崎、三好、加藤、宇佐美、大

住、小林、武内、高野、田中諸兄の奮闘を謝す。

九月十四日 齋藤幹事出征に依り難波幹事庶務部に移り

高野新幹事當部を擔當事務引繼を爲す。

九月廿五日 說教式練習舉行。

十月一日より三日間 勅額拜戴記念道路布教。

一日は雨天の爲中止。

二日 同 場所山門前

辯士 松木部長、武田教授、尾崎、加藤、土屋、熊王

宇佐美、大住、望月、太田、難波の諸君。

十月十日 山門祭禮說教出張。

十月十一、十二、十三日 宗祖鶴林會說教出仕。

十月十二日 映畫並に同道夜說教。

丸山執事、結城布教師、尾崎、土屋、眞能、宇佐美、

大住、難波、高野

映畫：ニュース、御一代記

監督 結城布教師

技師 米村、清水

解説 難波、高野

十月十三日 高野幹事召に應じ出征、難波幹事兼任と爲

す。

十月十三日 甲府立正閣御會式映畫布教出張。(結城布教

師、難波幹事)

十月十六日 秋季聯合雄辯大會開催。

吾が祖山の辯論部が一年間鍊磨せるの辯を大衆の眞只

中に吐露する待望の日である。而も本年は時正に非常

時局下國民精神總動員眞最中、護國の聖者日蓮棲神の

地に於て繼法鑽仰の青年學徒が立正安國の大精神の雄

叫びを爲さんとす。一山の衆の耳目はいやが上にも

此の上に注がれ八ヶ團體二十五名に依り交々論陣は張

られるに折柄公會堂も狭しとばかり來場せる聽衆は酔

へるが如く、魅せられるが如き中に大日蓮の抱負を聞

き感銘を深うした。

參加團體 立正大學、日本大學、池上學林、法苑學院

祖山中學林、木化同心會、男女青年團。

當日審査員諸先生を左の如く御願す。

遠藤是妙先生 松木本興先生 望月舜勝先生

今村是龍先生 望月歡爾先生

プログラム左の如し。

プログラム

一、玄題三唱 一 同

一、開會の辭 幹 事 高野教誓君

◇優勝カツプ返還式

一、審査員挨拶 本學教授 今村是龍先生

一、道は此處に在り 本 學 後藤 博君

一、時局に際して

祖山中學林 丘 龍芳君

一、宗教の時代性

立正大學部 鹽崎辨仁君

二、破邪顯正と儒教

本 學 田中寛光君

一、現代青年の指導者に訴ふ

本 學 福井泰嚴君

一、時局と青年

女子青年 伊藤たき嬢

一、日本精神と立正安國

本 學 加藤智學君

二、佛陀の道場へ

法苑學院 古館海靜君

一、根本佛教の精神より現代世相を見る

立正大學部 岩瀬惠音君

一、大和魂

本 學 厚海學眞君

一、所 感

身、延 青年 芹澤 德藏君

一、曉の大進軍

池上學院 鈴木戒厚君

◇優勝カップ授與式

一、時局と立正安國

本 學 米村智淨君

一、揆 搦

辯論部長 松木本興先生

一、よし膂力は無くとも

女子青年 内野千恵子嬢

一、閉會の辭

幹 事 難波智龍君

一、日支事變をして平和の序曲たらしめよ

本 學 望月孝雄君

一、玄題三唱

一 同

一、未 定

立正大豫科 野口戒心君

一、生活に意識を持て

女子青年 若林千登世嬢

本學優勝(カップ授與)

中 五 米村智淨君

一、盲目への道

本化同心會 片田爲丸君

同準優勝(賞品授與)

高 二 香川是光君

一、樂土建設への歩み

本 學 香川是光君

他校派遣優勝(カップ授與)

立正大學 鹽崎辨仁君

一、自ら燃えて聖火に點せん

本 學 眞野英秀君

同 準優勝(賞品授與)

池上學院 鈴木戒厚君

一、自ら燃えて聖火に點せん

本 學 眞野英秀君

男女青年優勝(カップ授與)

内野千恵子嬢

同 準優勝(賞品授與)

芹澤 徳藏君

十月二十三日 耕辯會開催。於高三教室。

尚本大會開催に際しては部長の御指導は云ふ迄もなく

野口、橋本、杉山の諸君賞演

本山當局、審査員諸先生の御参加並に各参加辯士諸君

十月二十四日 松木部長批評訓辭あり。

の奮闘に對し盛會の喜びと共に満腔の謝意を呈します

鏡圓坊祭禮講演出張。

尙當大會數日前より犠牲的御盡力を下さつた梅屋旅館

十月三十日 耕辯會開催。於高三教室。

御主人並に御一家の方々に深謝申上げ、併せて當日御

増田、田中(靜)、望月(孝)、小林(芳)、難波、上木、

芳志を忝なくした松司軒、加藤旅行案内所の方々に厚
く御禮申上げます。

宇佐美諸君の交々の熱辯は祖山雄辯道に一段の活氣を
添へるものあり。後松木部長の批評訓辭あり。

因に當大會前該當幹事として準備に専任する事久しう

十一月六日 説教式練習。(於釋迦堂)

して十二日征途に上り、此の盛會に會ひ得なかつた高

十一月十五日 立正大學各大學高專聯合雄辯大會に高三

野幹事の勞を多とするものであります。

尾崎龍雄君を派遣す。

十月十七日 甲府市制祭特別道路布教出張。

十一月二十日 甲府立正閣講演出張。

所 (A) 太田町公園

第三學期

(B) 甲寶劇場附近空地

二月十六日 宗祖降誕會雄辯大會開催。

以上

統率者 部長松木本興先生

辯士 小崎龍雄君、加藤智學君、宇佐美鍊昌君、難

波幹事

運動部

幹事 齋藤 威 遵

老若男女を問はず、今やスポーツは全世界を通じて非常な勢をもつて普及されつゝある。如是き時代が来る事を二十年以前には夢にも想はなかつたらう。それ程一般の人々が、スポーツに對して關心を持つ時代となつたのだ。オリンピック、甲子園がそれなのだ、今や吾が國にオリンピックが開催され様としてゐる時なのだ。凡そ若人たるものは屋内に引込み思案に沈り、神經衰弱の頭をひねらずとも「良く學び良く遊べ」の一語を以て身心の鍛鍊に勉むべきであらう。

社會の文化は雄辯と文學であると言はれてゐるが、健康なき處に何の雄辯、何の文學があらう、此處に於て必然起るべき問題は各自の健康である、譬ひ天才聰明、大

雄辯家と雖も病弱であるならば吾が日本帝國に生を得た價値がない、更に現代非常時國難を双肩に負ふだけの資格があるだらうか？ 此の超國難を打破し國家の柱石となるべき眞の資格者は健全なる体軀と、精神の所有者であらねばならぬと斷言す。

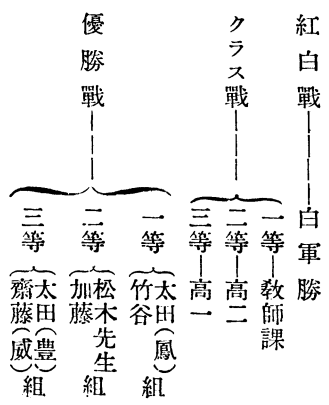
所謂「健全なる精神は健全なる身体に宿る」とユフエナルが言つた如く、如何に高遠な理想、抱負を以つても其れに伴はない肉体にては到底其の理想を實現さす事は不可能である。吾々青年宗教家が將來自覺せる宗教家として複雑極りなき社會の表面に立ち混沌として渦巻き流るゝ思想海に浮沈してゐる時代の人心を救濟するには本化別頭の大法を學ぶ事のみを以て能事終れりとしては居られない。自ら其の渦中に進んで行くと云ふ覺悟がなければならぬ。その覺悟がある以上身体の強健と言ふ事は片時も忘却してはならない。請ふ、獎勵を待つべからずより進取的なれ、幸にして吾が祖山は此處一二ケ年運動熱はいやが上にも高まり來る事は喜びに堪えぬものであ

る。必ずや近き將來に於て祖山運動部黄金時代の現出するを見るであらう。

△庭球部記事

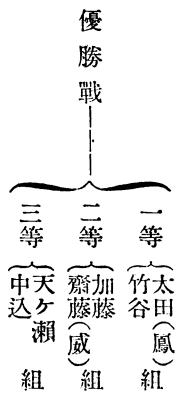
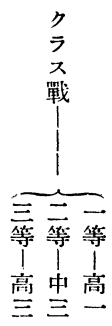
本年春葛原兄を當部より失つた事は實に残念である、然し祖山庭球部は竹谷、加藤、天ヶ瀬君が當部を堅く保守してゐる事は、欣びとする處である。第一學期新入部員として太田、中込君等を迎へて吾が庭球部のハリキリ方は大變なものだ。

六月廿日 春期校内大會を松木先生出席のもとに開催す成績左の如し。



十月廿三日 秋期校内大會を開催す。成績左の如し。

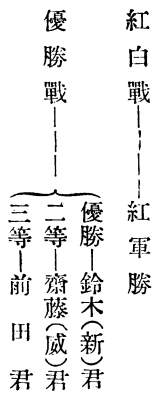
紅白戦———白軍勝



終に優勝旗は太田、竹谷組に授與せらる。

△剣道部記事

十月十日 秋期校内大會を劍士多數出場のもとに開催す劍士の意氣正に天をつくの勢、戦績左の如し。



高点試合——
 { 一等——日野君
 二等——前田君
 三等——齋藤(威)君

正月二十二日より小野五段を迎へて寒稽古をなし、三十日納會を開催し後猛練習して身中剣道部に挑戦する豫定である。

△卓 球 部

當部の存在こそ我が運動部に於ける唯一の誇なり。僅々數年間に於ける當部の長大足の發展や將に一大驚異の對象とも謂ひつべし。

名選手の輩出と相俟つて部員の烈々たる意氣、加ふるに臥薪嘗膽の血みどろの永き苦闘……今日の隆盛の豈偶然ならざるを察知すべし。

今や我が部の名聲は近く峽南の巷に喧傳され、遠く山靜の果に及べり。峽南の惑星と謳はれ堂々縣下の強豪陣に伍して伯仲の技を競ふに至りしは欣快の極みなり。然して過去を省みて轉た今昔の感を禁ず能はず。

現在の顔振れは藤、増田、鈴木、大森、竹中等、將に一騎當千の強豪を網羅せり、多年校内隨一の權威者の名をほしいまゝにせし藤、今や漸くその技を發揮し、これに加ふるに増田、鈴木、大森等その技愈々圓熟を加へ藤に迫らむとせば惑星竹中の擡頭するありて、今や將に群雄割據の盛況を呈し以て龍護虎搏の風雲を孕めり。

先きに藤英五郎君本年二月彼の山靜選手權大會に優勝し母校の爲に萬丈の氣を吐きしは當部興隆の最も力強き導火線となり、次いで甲府に於ける縣下學生チーム對抗に傳統を誇る甲中の強豪陣を攪亂し或は峽南隨一の強豪陣YSとの對戰に觀衆の眼を酔はしめ、中央大會豫戰峽南選手權大會等々に各々好成績を收め對外的飛躍の目ざましき躍進振り、對內的には望月寫眞館寄贈盃爭奪戰春秋二回に亘る校内大會等々に豪華を誇る。見よ此の絢爛たる豪華の足跡を！ 讚へよ祖山卓球黃金時代を！

昭和十二年度に於ける當部の記事次の如し。
 二月十一日 山靜大會出場選手決定試合舉行、林部長來

臨の下に卓球部幹事辭令授與式並に望月寫真館寄贈盃、
小友寛榮氏寄贈盃献納記念撮影等ありて錦上に花を呈し
以て近年稀に見る盛況を収む。

A組優勝 藤 君 (望月寫真館寄贈盃)

二等 小友君

三等 増田君

B組優勝 齋藤智靜君 (小友氏寄贈盃)

二等 帶金君

三等 石原君

同 青柳君

山靜兩縣下選手權大會

主催 祖山學院同志會

後援 山梨日日新聞社

東京卓球協會堂

四回戦前の戦績省略す

◇第四回戦

望	山	佐	藤	芦	石	味	増	山	佐	藤	芦	佐	藤
月	田	野	3	澤	原	岡	田	田	野	3	3	野	野
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
0	0	0	0	1	1	0	0	2	1	0	0	0	0
萩	鈴	小	佐	石	久	佐	坪	望	増	味	野	山	芦
原	木	友	野	原	保	野	島	月	田	岡	藤	田	澤
(身	(祖	(祖	(Y	(遮	(Y	(Y	(高	(Y	(祖	(身	(祖	(榮	(Y
鐵)	山)	山)	S)	信)	S)	S)	工)	S)	山)	鐵)	山)	榮)	S)

◇第五回戦

◇準優勝戦

◇決勝戦

藤(祖山) 3 --- 0 佐野(隆) (YS)

昭和十二年四月十八日

第十回縣下新人大會

主催 山梨卓球協會
後援 山梨縣体育協會

山梨日日新聞社

場所 山梨縣立甲府高等女學校

祖山を代表して藤君出場、今此處に藤君の戦績のみ記す。

藤 3 --- 0 千葉 (法曹) || 一回戦

藤 3 --- 0 五味 (甲中) || 二回戦

藤 3 --- 0 瀧田 (韭中) || 三回戦

藤 3 --- 1 井上 (甲商) || 四回戦

藤 1 --- 3 芦澤 (YS) || 五回戦

勇闘空しく五回戦に芦澤の強打に封ぜられ悲憤の紅涙をのみしは千載の痛恨なり、されど中央遠征への初陣として其の健闘の跡歴然たるを見て彼の技の那邊たるか察知

し以て雪辱の日を期役するや久し。

五月二日

山梨水晶遠征記

峽南随一たる強豪YSの陣容を粉碎し、以て峽南に覇者たらむの意氣すさまじく藤、増田、大森、鈴木、田口の名コンビになる強陣を調へ遠征の途に就く。試合は三点先取法と勝抜戦との二回に亘る、戦績左の如し。

◇三点先取法

YS		祖山
○芦澤	3 --- 1	増田 ×
×大日方	0 --- 3	藤 ○
○望月	3 --- 1	田口 ×
○久保	3 --- 1	大森 ×
○望月	3 --- 0	藤 ×

◇勝抜戦

Y S 祖山

×芦 澤 0 ——— 3 藤 ○

○久 保 3 ——— 1 田 口×

○大日方 3 ——— 1 大 森×

○望 月 3 ——— 0 増 田×

×久 保 1 ——— 3 藤 ○

×大日方 1 ——— 3 藤 ○

○望 月 3 ——— 1 藤 ×

我軍の悪戦苦闘も終に空しく刀折矢盡彼に屈せしは痛恨なれど此の一戦に於ける藤君の健闘目ざましく峽南の強豪を網羅せる彼のY Sの堅陣を攪亂せしめ祖山の爲めに萬丈の氣炎を吐きしは欣快の極みなり。

五月廿日

春季校内大會

本學講堂に於てA B二組に岐ち望月寫眞館寄贈盃並に小友寛榮氏寄贈盃争奪戦を舉行す。

A組 優勝藤君、二等増田君、三等鈴木君、

B組 優勝中村君、二等帶金君、三等香川君、笹部君

六月六日

第四回山靜チーム對抗大會

於身延中學校、此の日本學よりA B二チーム出場、A組善戰連勝破竹の勢すさまじく山身俱樂部を3—0にて軽く破り、次で身鐵、水晶B組等を各々3—1にて撃退せしめ堂々決勝戦に出で峽南の覇者Y S A組と對戦せしも武運拙く千載一遇の好機を逸せり。決勝戦に於ける戦績次の如し。

Y S 祖山

望 月 3 ——— 0 鈴木

久 保 1 ——— 3 藤

芦 澤 3 ——— 0 増田

望 月 3 1 藤

3 1

六月二十日

第一回縣下男子學校對抗大會

主催 山梨縣體育協會
後援 山梨日日新聞社
同 山梨卓球協會

於 甲府中學校

此の日本學代表として藤、田口、鈴木、増田、大森の
五選手優勝を期して堂々參加出場す、戦績本學外は省略
す。

○藤	3	0	高	中
×鈴木	1	3	望	月○
○増	3	0	千	野×
○大	3	0	小	澤×
田	口	瀧	田	

○鈴木	3	0	堤	×
×藤	2	3	井	上○
○増	3	0	大	木×
×田	1	3	望	月○
○大	3	0	千	野×
3	1			
×増	0	3	古	澤○
○藤	3	0	望	月×
×田	1	3	神	澤○
○鈴木	3	1	小	林×
×大	2	3	花	論○
2	3			
×大	0	3	高	工
×大	0	3	永	島○
3	1			
○鈴木	3	0	甲	商
×藤	2	3	井	上○
○増	3	0	大	木×
×田	1	3	望	月○
○大	3	0	千	野×
3	1			
×増	0	3	古	澤○
○藤	3	0	望	月×
×田	1	3	神	澤○
○鈴木	3	1	小	林×
×大	2	3	花	論○
2	3			
×大	0	3	高	工
×大	0	3	永	島○

×増 田 0 ——— 3 鶴 田 〇
 ×藤 1 ——— 3 永 田 〇
 0 ——— 3

本舞臺初の出陣を飾る此の榮光の事實は我が卓球史空前絶後の壯舉にして縣下中等校の王座として傳統を誇りし甲中の堅陣に對し龍讓虎搏の熱戦を交へ彼の陣容を十二分に攪亂し狼狽措く能はしめし壯快は、喩え武運拙く2—3、ゲーム得点實に10—9のドタン場迄追ひつめて惜負の血涙を收めしも其の戦績や峽南の惑星祖山の面目躍如たらしめき蓋し數年前に於ける學院卓球陣を知る人にして此の試合を観戦せしなば、只々驚嘆の聲あるのみならむ。實に此の一戦こそ、學院卓球部史を飾る劃期的事實として永久に記念さるべきのみ。

十月廿四日

秋期 校内大會

幹事來臨のもとに身延小學校に於て學院校内大會舉行。

優勝戰 一。藤君、二。増田君、三。鈴木君、大森君
 高點試合一。鈴木君、二。窪塚君、三。青柳君

第二回峽南卓球大會

十一月廿日 於身延中學

主催 峽南卓球聯盟

後援 山梨日日新聞社

本學より藤、竹中、大森、鈴木、増田、中村、帶金、青柳、鈴木寛君等參加、藤、竹中の兩君善く戦ひ入賞す藤君不調にて天運に恵まれず優勝を逸し決勝戦にて斃れ惜負の血涙をのみ勇闘空しく千載の痛恨を留む。

亦二回戦にて竹中、大森兩君の同志打ちのやむなきに至り、近來の好調を謳れし大森君、新鋭竹中君の健棒に斃れ、藤君、増田君の二回戦に於ける同志打は増田君の闘志と策戦に藤君攻撃を封ぜられ苦戦の中に一セットを先取され、暗雲の影を深め、挽回を危ぶまれしも精根の

限りを盡して健闘し纔に苦境を脱し3—1にて増田君を撃退し、次回戦に出でしも、その不調振りは優勝を期するに難く、僥倖を期待するの一途あるのみなりしも、哀れその僥倖も空しく決勝戦にて望月君(Y.S.)の猛撃に一蹴されしは惜みて餘りあるものなりき。

然れども、新銳鈴木君意氣軒昂にして第二回戦に於ける峽南の巨將望月君との對戦は近來稀に見る熱戦且つ激戦にして波瀾萬丈虚々實々の技を盡し宛然龍護虎搏の概あらしめ觀衆の眼を魅了せしめ以て祖山鈴木のシートを確保せし事は欣快の極みなり。喩へ3—1にて彼の老巧に屈せりと雖もその前途を囑望するに餘りあり。

準決勝以後の戦績を録す。

準決勝

望月(Y.S.) 3 ——— 0 萩原(山身)

藤(祖山) 3 ——— 1 竹中(祖山)

決勝戦

望月(Y.S.) 3 ——— 1 藤(祖山)

△野 球 部

一昨年、昨年と歩一步基礎を固め、向上の一路を辿つて來た我が學院野球部は、年更りて我等後進を人格的に技術的にうますよく指導誘掖された田邊、草ヶ谷、河南の三先輩を送り、それと共に山田監督、鈴木新主將以下前年度の鐸々たる猛者連に新入生の太田、武波君等を加へて、宿望の峽南大會三年連覇の偉業を達成せんと張り切つてスタートを切つた。然して鈴木主將は部員の勸誘に努力し、主として中二、中三から多數の入部を見た事は我が野球部の前途に彌が上にも多幸の影を投げるものがあつた。

部員諸君がああ何時もながらの小さなグラウンドにて日の暮れた後迄も、よく異体同心に互に勵まし合ひ、へとくになつて精進するさまは見る者をしてきつと何かの感に打たしたに違ひない。例年の通りに、今年も土曜日曜には小學校、中學校に出かけて或は町のチームと試合し、或は平生思ふまゝに出來ぬ外野ノック、フリーバ

ツチングを行つた。高い日の下に、廣々とした氣分にて練習する壯快味、又練習半ばに丸くなつて寄宿舎より持参した握り飯を食ふ時の美味さ等、此等は平生離脱した處に自由を奪はれ、まづい味噌汁しか食はぬ者だけに、特に深い感銘を得、苦しさの中にも祕かに他の者に味へぬ喜びとした處であつた。

又野球部として決して多からぬ部費は必然的に部員の經濟的負擔を少しばかり強ひたが、よく此の難を突破して二、三年前に比べて用品も漸く揃つて來た事は何よりも嬉しい事であつた。もつと暇と費用があれば一日か二日位は遠征もしたいと思つてゐたが、それも實現されず僅に近くのチームを撃破しては渴を癒やしてゐた。

其の内、待望の峽南大會が今年は非常時局下に一人の意義を副へて、秋もいよ／＼深まり薄ら寒ささへも感ずる十一月二十日に開かれた。

我軍王者の貫祿を示しつゝ入場した。鈴木主將より優勝旗を返還し、午後一時半、第一回戦の幕は切つて落さ

れた。先づ身延中學通學生チームと對戦す。學校を終つて多數の諸兄が應援に駆けつけてこられた。敵はレギュラーを二、三名交へ仲々強敵であり、前半接戦を繰返したが後半に入り我軍の奮闘物凄く遂に二十對六にて快勝す。

翌二十一日午前十時準優勝戦に身鐵クラブと對戦、我等の意氣の赴く處無人の野を行くが如く、敵陣を攪亂して二十對〇、五回コールド・ゲームにて一蹴す。

午後、優勝戦にて鰍澤チームと當る。折悪しく雨が降り來たり、その中に兩軍必死の意氣物凄く、我れが三年連勝の榮を得んとすれば、彼も亦雪辱を期して戦はぬ先既に激烈な争鬪が豫想された。

祖山	0	0	0	3	2	0	0	5
鰍澤	2	2	0	0	0	0	0	4

兩軍メンバー

澤 鰈		山 祖	
崎川橋澤瀨柳村澤藤	得点 4	部竹谷本木波原田田	得点 5
安打 5		安打 6	
場 矢山大深一青志 遠	四球 7	三振 5	
三振 9		四球 7	
失策 2		三振 5	
盗壘 5		失策 0	
失策 2		盗壘 3	
		失策 0	

我軍先攻にて、例の如く笹部巧みに出壘したが後援續かず、代つて宮本投手の肩定まらず、無死満壘に敵の頼む強打者深澤に左中間に安打を許し、ぬかるみに變轉し不幸二壘打となり二点を許した。

第二回、我軍三壘に走者をおいたがスクイズ失敗し挽回ならず、その裏、又敵に二安打を許し更に二点を加へられ、我軍の前途漸く悲觀されるに至つた。三回をすぎ四回に入れば俄然奮起した我軍は、斃れて己まんの氣概にて青竹、竹谷四球の後、宮本痛烈なる二壘打を中堅越に放ち歡聲裡に青竹生還、竹谷三本間に狹まれ危なく見

えたが、よく三壘手暴投に還り、鈴木亦ヒットを放ち宮本生還、一点の差に迫り試合は全く白熱化した。相變らず雨は一層激しく降る。スパイクに踏まれたダイヤモンドは全く泥海と化し、各選手のエニホームは至る處泥が付着した。此處で強敵鰈澤に若し一点でも入れられるならば最早や望なし、死んでも今後一点も許すまいと一同悲壯な決心をして守備につく。

宮本投手の調子やゝ復し、三振凡打に打取り、背後の好守又水も漏らさず、五回笹部大きく二壘打して出で、青竹四球、二死後鈴木三壘失に笹部還り、猶ランナー一壘にあり、武波次いで投ゴロに危はや萬事休すと見えだが、敵投手一壘に暴投し線外に轉々す。青竹勇躍ホームベースを踏めば、鈴木亦決死の勢にて本壘に殺到、泥濘に手よりすべり込む。一瞬右翼手よりの送球速く、審判の手高くアフトを宣す。あゝ。然れども胸より脚へ一杯、泥まみれになつたその姿を見て誰か感激しないものがあらうか。我等の元氣は更に倍加するを覚え、一層張

り切りの度を加へた。敵亦二死後ながら二壘打を放つたが、よくしまつて入らせず、六回、梅原、内田二走者をおき、山田宿將憂然バットに音あり流星の如く左翼に飛ぶ、危やヒットと思はれたが惜しくも敵真正面を突き得らる。敵一死後、烈しくライナーで二壘横を襲ふも鈴木隻手に捕へ、右翼大飛球内田亦好走よく捕へる。

最終回に入り竹谷三壘に猛衝を呈し、決然一壘にすべり込むも惜しくも刺され、後走者を出せど空しく。一点勝越のまゝいよ／＼土壇場に來る。敵強打者深澤バツタ一ボックスに現はれ、不氣味な豫想に觀衆等しく沈黙したが宮本投手の快腕冴え遂に三振に退け、次いで四球に出すも二盜に殺し、最後遊匍、ショートよく泥の中を掬ひ上げて好投、見事一壘手山田の手に収まつた。

遂に勝つた。勝つた。興奮、緊張した顔にもほのかに喜びの色が見えた。遂に先輩の偉業を継ぎ三年連覇を爲した。三日間を通じて宮本投手の好投、優勝戦に於ての内外野の好守備、特に山田名一壘手數々の難球を處理し

捕手と三壘手との好リレーによる敵走者の鮮やかなる刺殺、笹部遊撃手の絲を引いたやうな送球、青竹、内田兩外野手のカバー、鈴木、梅原の好打等すべて日頃の練習の結果を餘す所なく表はしたものであつた。

本大會打擊ベスト 4

原	木	本	部
梅	鈴	宮	笹
0.500	0.375	0.363	0.333

我等は今年の結果に満足せず、更により明朗、堅實なる野球部への飛躍を期す。

終りに學院諸兄の熱援を感謝します。

十一月廿二日 校内クラス野球大會を執行す、各級代表選手は雨天を物ともせず優勝を目指して大いに奮戦した
同大會の 優勝 中三級

準優勝 高三級

文學部

幹 事 穗 坂 眞 彌

時の推移、それは文學の必然的要求の叫びである。私達が如何に幽遠な真理の把持者であらうと、將た深淵なる思想の所有者であるとしても、其處に文學の存在を若し認め得なかつたと假定したなら、その幽遠な真理も、思想も、共に限られた個々の人生のそれ以外に存續し得ない。よしそれが存續し得たとしてもそれは不的確なものである事の非は免れ得ない。世界の三聖として謳はれる佛陀の慈悲の教も、基督の愛の教も、孔子の仁の道も共に文學の力なくしては現代私達の胸底深く喰ひ入つて除去し難い根柢を持つと云ふことも許容出來得ないことであり、また考へ得ないことである。私は今、時の推移それは文學の必然的要求の叫びである、と前言した。私の言つたことは妥當を缺いた言葉かも知れない、然しそれが全然否定されるものではなく尙一面の眞理性を有つ

言葉として容認される可能性のあることを私は信ずる。

かうした私の考へから云はしむれば、文學は古しへの所有する人々の思想、研究、思索等を現今(後世)の私達にまで送り届けてくれる重要な役割をなすものであると、更に節言するならば文學は時(昔—今)から時(今—後世)への然も重責を負つた傳達夫である。

本會文學部も此の意からして設置されたことは次の條則によつても推察される。

第四條 本部ハ雜誌棲神ヲ發行シテ會員ノ文想ヲ鍊磨

シ研究及ビ意見ノ發表機關トス

即ち私達學徒の文想を鍊り研究及び意見(思想)の發表機關として『棲神』なるものが年々發行されて來たことは事實である。そして此の『棲神』によつて祖山文學の命脈が所謂「時から時へ」と移されて今時に至つたことも贅言を要しない。然も茲數年間に於ける幹事諸兄の献身的努力によりその飛躍的進歩の結果は『棲神』を權威ある學報として一躍斯界の檜舞臺へ登場させることに

なつたのである。

しかし私達にとつて權威ある學報としての『棲神』は「然其書浩瀚人多興望洋之歎終置之高閣」の感を抱かしめ、剩へ前掲の「會員ノ文想鍊弊」云々の本誌創刊當初に於ける條則の趣旨に悖つて同胞學徒の投稿するものゝ余りにも尠きに至つては、思ひ半に過ぐるものがあつた。此の点前年度幹事の牛居兄とも數々其の編輯方法に就いて懇談したことがあつたが、とにかく學界の權威はあつたにしても、その内容そのものが私達學徒のものでないとしたら恐らく巨額の資用を投じて、然も該當幹事津が幾分なりとも學業まで犠牲にして努力する編輯から刊行までの勞苦は何によつて慰はれるか？ 私達の唯一の發表機關であり、然も特に私達學徒の爲に發行されてゆく此の『棲神』のすべてが學徒自身のものであつてこそ始めて投資の意義もあり、また幹事の勞苦も心根から慰はれるのである。私は今年度の編輯は會員諸兄を中心として原稿を募集した。それで校外の諸先生にはあまり

御寄稿を依頼しなかつたが、然し第一回、第二回の募集には一人も投稿がない。第三回めの募集にやうやく三、四の投稿を見たのみ。これでは到底會員中心など云ふ方針ではやつてゆけない、と思つた時はすでに二學期も半ばに入つてゐた、苦しい時の神頼み式に方々へ當つて依頼して見たけれど何れも急場の用に間に會はない。それで結局は今までに依頼して置いた方々のだけを組版に付することに、やうやくこれだけまでに出來上つたので、唯だ學生諸兄の投稿の尠かつた事が遺憾に思はれる。そして私の編輯方針が一も二もなくあつさりと裏切られたことを私は私自身に訴へやうとする。そして一年間に於ける文學部としての仕事に對し私の熱意の足らなかつたことは該當幹事として自責の念に耐へない。然し私の仕事に對し消極的な氣分をもたせるやうにしたのは誰の罪でもない、それは今年の大會に於ける四辻兄の提案が決議されたことである。

「赤字負擔は各部幹事に於て責任をもつこと」私達幹事

は會員と遊離した請負師的存在ではないのだから……況やそれを職業とするものでない限り各部共に未経験者ばかりなのだ。會員諸兄の支持なくして請負仕事に手を出した私は性來の氣象からして思ひきつたことの出來なかつた事は仕方がない。

私の部としての仕事はこれで大体終つたことになる。以上は私の文學部に對する感想の偽らざる述懐である。

— 十二、五 —

◆文學部へ寄贈書籍

立 正 史 學	立 正 大 學 史 學 會 殿
叡 山 學 報	比 叡 山 專 修 院 叡 山 學 會 殿
信 人	松 楓 居 殿
求 道	求 道 園 殿
山 柿	山 柿 會 殿
鶴 林	池 上 學 林 殿
其他新聞雜誌等	各 位 殿

